リレーエッセイ

顔の見えるお付き合い

東京理科大学の由井先生より，リレーを引き継ぎました北海道大学の石坂です。筆者は，昨年度まで「ぶんせき」誌の編集委員の一人として本誌の編集のお手伝いをさせていただく立場にあった。当初は，日本分析化学会の機関誌にリレーエッセイの記事は果たして必要であるのか？と，いささか否定的な意見を持っていたが，編集委員長の楠先生のもと，ぶんせき誌は，会員の多様な価値観に応えるべく，リレーエッセイを含む多様な記事を積極的に掲載すべきであるとの明確な方針で編集されていることを知るに至った。この度，リレーエッセイの執筆依頼が来た際に，一瞬引き受けるべきか迷ったが，10年来の友人の一人である由井先生には，これまで討論会（北見）や東京コンファレンスでの若手企画などにおいて，影の実行委員としてサポートしていただいた経緯（多大な借り）があり，執筆依頼を無下に断り切れなかったのが正直なところである。エッセイとは，個人の見聞・経験・感想を自由な形式で述べた散文であるが，筆者は昨年度まで若手交流会の全国代表を仰せつかっていた経緯から，若手交流会の活動紹介に紙面を拝借させていただこうかと思う。

皆さんは，日本分析化学会の公式な若手組織として若手交流会が存在するのを御存じであろうか？　筆者が日本分析化学会若手交流会とかかわりを持ったのは，2000年8月に草津で行われた分析若手夏季合宿が最初である。21世紀基金最後の企画運営委員長であった原田　明先生（九大）より，北海道支部からの参加を勧められたのがきっかけであった。「分析21世紀基金」の解消期限が翌年2月末に迫っており，以後の若手の活動をいかに継続するかに関して議論がなされ，2001年に「若手交流会」（http://www.jsac.or.jp/wakate/wakate.html）が発足した。この草津会議以降，筆者は若手交流会の北海道支部代表として若手交流会の活動に携わり，2007～2009年度に全国代表を務めた。ちなみに現在は，徳島大学の藪谷智規先生が全国代表を務められている。若手交流会の主な活動は，討論会ならびに年会における各支部若手の会主催の若手企画のサポートを行うとともに，春の討論会の折に，若手交流シンポジウムと題して全国の若手が一同に介する勉強会ならびに意見交換会を開催することにある。本年度は，藪谷先生のお世話のもと，第71回分析化学討論会（島根大学）終了後に，松江しんじ湖温泉で若手交流シンポジウムが開催された。話題提供の2件の講演を聞いた後，夜遅くまで交流が深められた。上は40歳以上のオーバーエイジ枠の先生から，下はマスターコースの学生さんまで，総勢20名強の参加者があり，個性豊かな方々と，楽しく，有意義な時間を過ごすことができた。草の根的な活動ではあるが，日本分析化学会会員の裾野（すその）の拡大につながればと思う次第である。

先日，NHKで「無縁社会」をキーワードにしたテレビ番組が放映された。社会と個人のつながりが薄れつつある日本社会で必要とされる「絆（きずな）」の新しい形とは何かを模索する番組内容であった。最近は，携帯メール，ネット上に書き込みをするツイッター，掲示板，ブログなどでのコミュニケーションが当たり前となり，若者の中には，現実世界での人間関係から逃避して，ネット上のバーチャル世界に自分の居場所を見いだして抜け出せなくなる者もいるようである。また，競争社会の中で自己責任論のことばに縛られ，親戚や友人に悩みを相談できずに，第三者に悩み相談を行う有料電話サービスを利用する若者も増えているそうである。人とのつながりが薄れていくことで，社会とかかわることに消極的になり，さらにつながりが薄れていく“無縁社会の悪循環”に陥った若者たちの姿が描かれていた。人間関係が希薄になりがちな現代社会において，「顔の見えるお付き合い」は，ますます重要であろうと思う。お互いに刺激し合える同世代の仲間が沢山できると，学会活動も楽しく有意義なものになるのではないかと筆者は考えている。おおむね40歳以下の日本分析化学会会員であれば，誰でも若手交流会のメンバーである。若手研究者ならびに学生の方々には，このような若手交流会の企画に積極的に参加頂き，切磋琢磨（せっさたくま）できる仲間を見つけ，また，世代を超えた人脈を広げる場として活用いただければと思う。今後も顔の見えるお付き合いの良き場として若手交流会が継続されることを切に願う次第である。

次回のリレーエッセイは，長崎大学工学部の永谷広久先生にお願い致しました。先日，長崎大学にお邪魔した際に，うちわ海老をつまみにお酒を酌み交わしながらリレーエッセイ執筆のお願いしてみたところ，快く引き受けてくれました。メールではなく，直接会ってお願いすることはとても重要ですね。

〔北海道大学大学院理学研究院　石坂昌司〕